知識の花弁

三田メディアセンターだより

No.5
2015春

三田メディアセンターの3つの図書館

三田メディアセンターにおける利用者ニーズの把握

コレクションの広場
佐藤朔文庫

図書館の舞台ウラ
オリエンテーションエリアで会いましょう！

貴重書紹介
『イーリアス』

スタッフレポート
IGeLU：Ex Libris ユーザー会年次大会に参加して

主な出来事（2014.10-2015.3）

慶應義塾図書館

三田メディアセンターの3つの図書館

図書館（新館） 図書館旧館 南館図書室

三田メディアセンターには3つの図書館があり、人文・社会科学分野の専門書を中心とした約270万冊のコレクションを所蔵しています。約36,000タイトルの雑誌のほか、オンラインデータベースや電子ジャーナルなどの電子資料も数多く導入しています。知の宝庫である三田メディアセンターを使いこなし、みなさんの学習・研究に役立ててください。

図書館（新館）

三田キャンパスのメインライブラリーで、学習用図書、レファレンスブック、雑誌、新聞があります。研究用資料（文学部）も置かれています。

1F メイン・ILLカウンター

資料の貸出・返却、
予約・取寄資料の受取はこちらへ

［ILL］

図書館間相互協力（InterLibrary Loan）のことです。ほかの地区のメディアセンターや学外から、文献のコピーや資料そのものを取寄せることができます。

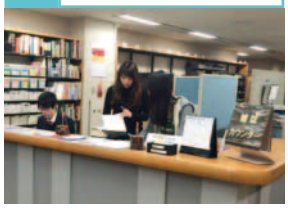
［レファレンスサービス］

みなさんの情報収集や資料検索のお手伝いをするサービスです。「レポートの文献を集めたい」「統計データを調べたい」「欲しい資料が見つからない」…そんなときは1階レファレンスカウンターへお気軽にご相談ください。

1F レファレンスカウンター

電子資料や学外の資料検索など
レファレンスサービスはこちらへ

3F 雑誌カウンター



雑誌、新聞、統計・年鑑に関する
ご相談はこちらへ

1F 展示室

様々なテーマの展示で
貴重な資料を公開しています

1F オリエンテーションエリア

調査研究に役立つセミナーや
オリエンテーションを開催しています
▶申込みはレファレンスカウンターへ

2F リザーブブック

館内で利用できます

3・4F データベースエリア

電子資料を利用できるPCがあります

［電子資料］

オンラインデータベースや電子ジャーナル・電子ブックのほか、CD-ROMやDVD-ROMなどがあります。
リモート※で自宅から利用できる電子資料もあります。

※リモートアクセスサービス

リモートアクセスを利用するには「慶應ID」による認証が必要です。

3F マイクロ資料

［マイクロ資料］

原資料のページを写真フィルムに縮小して印刷した資料です。マイクロリーダーと呼ばれる専用の機械で拡大映写して利用します。機械の操作方法は、3階雑誌カウンターでご案内しています。

図書館旧館

洋書、和書（~1961）のほか、学位論文、視聴覚（AV）資料、和装本などがあります。研究用資料（経済学部）が置かれています。

3F 入館ゲート・カウンター

図書館旧館は3階から入館できます
資料の貸出・返却もこちらへ

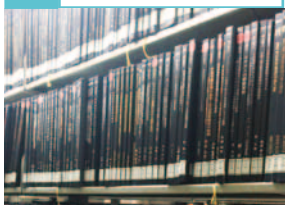
1F 図書館旧館入口

建物の入口は
研究室棟側にあります

3F 視聴覚（AV）資料

CD・DVD・レコード等を
館内の機器で視聴できます

1F 学位論文



慶應義塾大学の修士・博士論文を
所蔵しています

［学位論文］

文学研究科・経済学研究科・法学研究科・商学研究科・社会学研究科の修士論文と博士論文を所蔵しています。学位論文は、複写や貸出などの利用に一部制限があります。

B2F 和装本

明治以前に出版された和装本を
数多く所蔵しています

南館図書室

図書室は南館地下2・3・4階にあります。法務研究科（法科大学院）の資料のほか、研究用資料（法学部・商学部）が置かれています。

［リザーブブック］

授業の担当教員が指定した教科書や参考書です。利用が集中するため、貸出はしていません。貸出を希望される場合は、同じ資料がほかの棚に置かれていることもありますので、KOSMOSで検索してみてください。

B2F リザーブブック

法務研究科のリザーブブックを
館内で利用できます

B3F 入室ゲート

図書館は地下3階から入室できます

B3F カウンター

資料の貸出・返却は
こちらへ

KOSMOSで検索してみよう！

KOSMOS

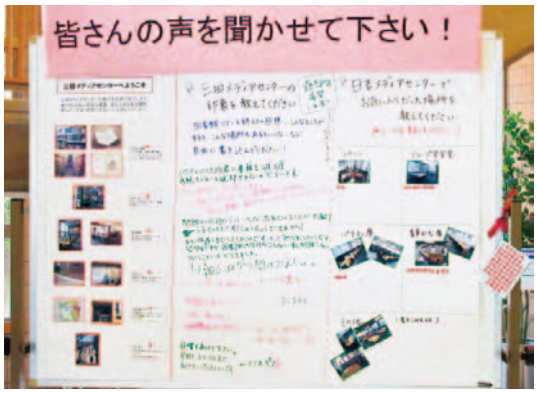
慶應義塾大学が所蔵する、図書、雑誌、電子ジャーナル、電子ブック、CDやDVD等の視聴覚（AV）資料、学位論文、和装本、貴重書などを同時に検索することができる蔵書検索システムです。KOSMOSはインターネットに公開していますので、PC・スマートフォンから利用することができます。三田メディアセンターは、図書館（新館）・図書館旧館・南館図書室の各フロアにKOSMOS専用端末を設置しています。

“三田メディアセンターにおける利用者ニーズの把握”

三田メディアセンターでは昨年度、利用者のみなさんが図書館に対して抱いている要望を把握することを一つの目標に掲げ、調査分析を行いました。具体的には、利用者ニーズワーキンググループを立ち上げ、ボードアンケート、ゼミ対象アンケート、インタビューという3種類の調査を行い、学部生を中心としたみなさんの活動や意見に耳を傾けました。幸い多くの方の協力を得ることができ、少しずつではありますが、その後のサービス改善に活かしていますので、今回その活動について紹介したいと思います。

ボードアンケート調査（実施期間：2014年4月～5月）

2014年の春に三田メディアセンター入口脇にて、ボードアンケートを実施しました。新しく三田に来た学生向けにメディアセンターの紹介をしながら、その印象を自由に書いてもらうというものでした。出だしこそ伸び悩むものの、一つコメントが書き込まれると、他の人がそのコメントに対して答えるといったような相互作用も生まれ、コメント欄を何度も拡張するほどたくさんの意見をいただくことができました。



ゼミ対象アンケート調査（実施期間：2014年7月）

2014年度の春の文献探索ツアーに参加したゼミを対象にアンケート調査を実施しました。結果として、文学部、経済学部、法学部、商学部の4学部がある三田キャンパスでは学部により学習スタイルや図書館の利用状況に違いが見られることがわかりました。紙媒体と電子媒体の利用頻度については学部によって異なるものの図書館の資料はよく利用されており、図書館員としては嬉しいものでした。研究分野やゼミの研究スタイルによって、更なる資料の充実、複数で勉強できる場所の増設など要望にも違いがあり、大変興味深いものでした。

インタビュー調査（実施期間：2014年8月～9月）

ゼミ対象アンケートに回答してくれた方に対して、さらにインタビュー調査を実施しました。回答内容について直接話を聞くことで、アンケートには現れなかった要望についても、理解を深めることができました。図書館を頻繁に利用している人の声を聞くことができたので、次の機会では普段はあまり利用していない人の声も参考にしていきたいと思います。

利用者のニーズに応えるために

ボードアンケート、ゼミ対象アンケート、インタビューという3種類の調査を実施し、多くの利用者のみなさんの要望をいただくことができました。その要望の中からすでに改善に向けて取り組んでいるものもあります。具体的には閲覧椅子の新調、蛍光灯のこまめな点検、館内アナウンス音量のボリューム調整、資料貸出手順の簡素化、「引用・参考文献の基礎講座」の新設などです。

ボードアンケートでは日曜開館について非常に多くのコメントをいただきました。そこでインタビューでも尋ねたところ、ゼミによって利用したい時間、場所、サービス内容が異なり意見が分かれました。実施に向けてはコスト面の問題などの課題がありますが、少しずつ実現する方向で検討を重ねています。

これからもみなさんの意見を取り入れ、改善に励んでいきたいと思います。ご協力どうぞよろしくお願いいたします。

コレクションの広場

佐藤朔文庫

研究室棟には、慶應義塾に深く関わりのあった研究者の旧蔵書に個人名を付けた文庫が数多くあります。その中で今回ご紹介する佐藤朔文庫は蔵書が8,000冊を超える、規模の大きな文庫です。

佐藤朔（1905-1996）は、カミュ、コクトー、バルザック等、多くのフランス文学作品の翻訳を手がけたことで知られています。義塾の仏文科で学生時代を過ごした佐藤は、卒業後教員となって、ボードレールの研究やフランス語教育を行う傍ら、文学部長、常任理事、図書館長、塾長と、数々の要職を務めました。また図書館長時代の1966年には、学生時代から交友のあった三田の文人に呼びかけて著作や資料を集め、「三田文学ライブラリー」を開設し、義塾の貴重なコレクションを築きました。

要職を退いた後、1976年のウェーランド経済書講述記念日には名誉教授として三田演説館で、「ボードレールと私」[1]という演題で記念講演を行っています。その中で「私は長いこと、ボードレールを読んできたのですけれども、結局ボードレールの作品を読むこと、テキストを読むことが、一番大事なことだと思っています。」と語っています。

佐藤の自宅には2万冊を超える膨大な蔵書があったそうです。晩年に、自ら図書館への寄贈意思を表明し、それを受けて門下生が協力して本を選び出し、文庫が創設されました。蔵書はフランス文学を始めとして言語学、芸術、教育行政、慶應義塾関連図書や文人仲間の著作と多岐にわたっています。

ボードレールの代表的な詩集
『悪の華』の原書と佐藤 朔の翻訳書

文庫の中には佐藤朔が繰り返し繰り返し読んだであろう、文学作品の原書（前述の「テキスト」）が数多く収められています。また、佐藤自身が翻訳した作品もあり、同じ版の翻訳書が2冊並んでいる場合は、1冊には出版後の訳語の変更やコメントが書き加えられているものが多く、推敲の軌跡が伝わってきます。

文庫は研究室棟の閉架書庫にあるため、残念ながら直接書庫に入ることはできませんが、『慶應義塾図書館所蔵佐藤朔文庫目録』[2]で調べ、出納手続きをして閲覧することができます。門下生によって編纂された目録を手にすると、佐藤の実り多き人生を感じ取ることができます。（山田雅子）

1）佐藤 朔. ボードレールと私. 三田評論. 1976, no.761, p.24-45.
2）慶應義塾図書館. 慶應義塾図書館所蔵佐藤朔文庫目録. 慶應義塾大学三田メディアセンター, 1997, 655p.

図書館の舞台ウラ

オリエンテーションエリアで会いましょう！

1Fレファレンスカウンター横の小スペースをご存じでしょうか？ 2014年3月に「オリエンテーションエリア」と名称変更しました。2004年10月に「CD-ROMコーナー」から「データベースエリア」となって以来、約10年ぶりです。名称変遷のとおり、以前は、CD-ROMやデータベースを使う場所と位置付けていましたが、図書館のオリエンテーションをとおして学生と図書館員が結びつく貴重な場として、もっと有効活用しようという思いで改名し、設備を一部変更しました。

より多くの方がオリエンテーションに参加できるように、データベース用のPCを移動し、壁面には投影機能のあるホワイトボードを設置しました。知る人ぞ知る事ですが、メディアセンターは、建築物としての図書館新館の細部にも気を遣っていて、壁面タイルを傷めずにホワイトボードを取り付けることに苦労しました。何度も義塾の工務担当に相談し、ようやく実現したものです。場所の名前を覚えていただくために、SFCのFab Spaceをサポートする学生に協力してもらって「ORIENTATION AREA」のサインも手作りしました。小さなスペースですが、様々な方の助けをいただいて、より使いやすくする努力をしています。

図書館オリエンテーションは、3つのメニュー（文献探索ツアー、データベース体験講座、引用・参考文献の基礎講座）を基本に、ゼミなどのグループ単位で受け付けています。少人数の場合は、レファレンス担当者と机を囲んで、ワークショップ形式とすることもできます。図書館活用スキルは、情報活用スキルそのもので、社会に出ても通用する能力です。一度レファレンス担当からそのスキルを学んでみませんか？ オリエンテーションエリアでお待ちしています。オリエンテーションを開催していない時間帯は、個人や少人数での学習・研究用に利用することができ、ホワイトボードを使って意見交換している学生の姿も見られます。知的コミュニケーションの場として、ぜひご活用ください。（レファレンス担当）

貴重書紹介

『イーリアス』 アレグザンダー・ポープ　初版　ロンドン　1715–1720年

Pope, Alexander (1688–1744)　*The Iliad of Homer*　London: Printed by W. Bowyer, for Bernard Lintott, 1715–1720.　6v. ; 30cm.　[EL@11B@197@1, 2, 3, 5]

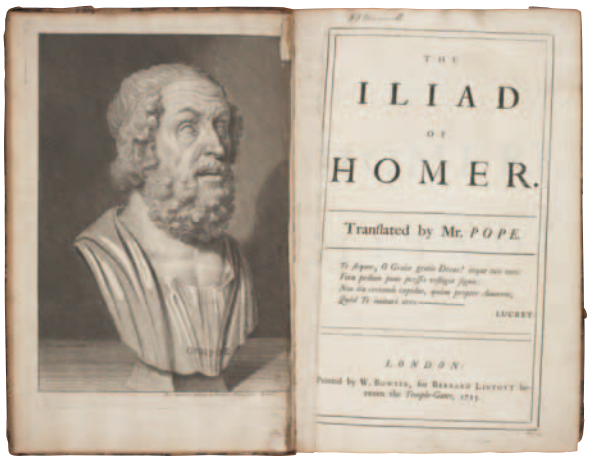
髙橋　勇（文学部准教授）

ある言語で書かれた文章を他の言語に移し替える「翻訳」という事業には、常にさまざまな障壁が立ちふさがる。厳密に情報を伝えるのか、大まかな意味を提示するのか、口調を彷彿とさせるべきか、はたまた音声までも再現するべきか。中でも、ある言語の音とリズムと意味を連携させて一つの作品を紡ぎあげる「詩」は、もっとも翻訳が難しいジャンルであるといえる。特に発音や文法が大きく異なる言語間では、この困難はほとんど克服不可能であるとすら思われる。

その一方で、この難事業に正面から取り組むことにより、元の作品の素晴らしさと翻訳先の言語の特徴をより深く理解し、結果としてその言語に新たな生命を吹き込む例も多々ある。身近なところでは、明治・大正期の日本の翻訳文学が思い浮かぶかもしれない。アレグザンダー・ポープによる叙事詩『イーリアス』の翻訳は、近代英語において同様の、極めて重要な役割を果たした作品だった。

『イーリアス』は言わずと知れたギリシア文学の古典であり、その後のヨーロッパ文学の礎となった作品である。ホメロスなる盲目の天才詩人が創作したとされるこの叙事詩では（現在ではホメロスという単一の詩人ではなく、口誦で伝承された作品が紀元前8世紀頃より整理・記述されたと考えられることが多い）、神話・伝説上のトロイア戦争の顛末が語られる。トロイアの王子パリスによる美女ヘレネの誘拐、英雄アキレウスとパトロクロスの友情、名将アガメムノンとアキレウスの確執、知将オデュッセウスの策略、そしてクライマックスとなるアキレウスとトロイアの勇将ヘクトルの一騎打ちなどは、ギリシア神話をかじった者なら誰しも目にしたことのあるエピソードだろう。

アレグザンダー・ポープは名誉革命勃発の年にカトリックの家に生まれ、英国国教会が主流を占めた当時のイギリス社会の中で多大な苦労を強いられた詩人だった。その信仰ゆえに大学への進学は叶わず、彼はほぼ独学でギリシア語、ラテン語、ドイツ語、フランス語を習得し、若年よりあらゆる文献を濫読する。さらに生来、今でいう骨関節結核に蝕まれ病弱であったために、当時英国のカトリック教徒にかろうじて開かれていた大陸での立身出世の道も閉ざされ、ほとんど必然的に文筆を生業とすることとなった。だが類まれなる詩才と社交性に助けられて20代で早くも文名を上げた彼は、25歳の時にホメロス翻訳の大事業に着手する。



ホメロスの胸像

1714年3月、ポープは書籍商バーナード・リントットとの間に翻訳に関する契約を結んだ。この契約の特異なところは、かのポープ氏の翻訳であることを広告して予約購読者を募り、その上で順次翻訳を刊行していったことである（刊行には足かけ6年かかっている）。これは作者にとっても書籍商にとっても、出版部数の見積もりと事前収入といった点で多大なメリットのある形態であった。気鋭の詩人による古典の翻訳とあって、ポープの『イーリアス』は未曽有の反響をもって迎えられ、（1976年時の）日本円にして6000万円もの収入を彼にもたらしたという。引き続いて上梓されたホメロスの『オデュッセイア』翻訳と併せ、彼の手にした額は1億2000万円に上る。

その出版形態と経済的成功はしかし、ポープ訳『イーリアス』の文学的価値と比べれば些細なことと言えるかもしれない。ホメロスに私淑して叙事詩『アエネーイス』をものしたローマの大詩人ウェルギリウスの影響もあって、ヨーロッパ文学の始源にして最高峰とされたこの作品は、だからこそさまざまな言語への翻訳が試みられ、翻訳者に巨大な課題を突き付けてきた。英語に関していえば、音の長短でリズムをつくるギリシア語の詩を、音の強弱でリズムを作る英語でどのように表現するべきかといった問題が発生する。そのようななか、原詩の言語の持つ雄勁さ・壮麗さを、単調に陥る惧れもある定型詩の枠内に留まりつつ、あらゆる文法的・音声的技法を駆使して単なる意味の移し替えではない真の「英語の詩」として十全に再現した最初の詩人こそがポープだった。ここでは詳述できないが、その語法・音楽性が英語という言語の可能性を広げ、原語でホメロスを読める者読めない者を問わず、その後ながきに亘ってホメロスの定訳にして英詩の古典という地位を確立したのである。

のちにポープとは袂を分かってしまったが、出版元のリントットは同業のジェイコブ・トンソンとともに17世紀後半から18世紀前半を代表する書籍商で、当時の主要な文学作品を軒並み出版していた。また世界初の出版物カタログを発行するなど、広告を戦略的に利用した最初の書籍商でもある。印刷したウィリアム・ボウヤーもまた当時の重要な印刷業者であり、文学作品その他の多種多様な作品を世に送り出していたが、一方でこのころ飛躍的に発展した中世イギリス研究への理解も深く、この分野の画期的研究を多数出版した学究的印刷者だった。

ポープの『イーリアス』には大判二つ折版（large folio）と小ぶりの二つ折版（small folio）、十二折版（duodecimo）の三つの版があるが、慶應義塾図書館の蔵書はこのうち小ぶりの二つ折版の初版で、破損が進んではいるものの出版時の製本を残した良品である。慶應義塾図書館には、大正の大学令によって慶應義塾大学が設立された頃より英語教員として教鞭をとり、のちに文学部教授となった平岡好道（佃住吉神社の第11代宮司でもあった）によって昭和39年に寄贈されている。タイトルページには “H. F. Bramwell” の署名があり、19世紀の後半にギリシア・ラテン文学を題材として雑誌等に詩を発表していた詩人ブラムウェルの旧蔵書であったとおぼしい。全6巻のうち、残念ながら4巻と6巻が欠けているものの、日本ではあまり知る者のいない18世紀イギリスにおける文学・出版界の一大イベントのよすがとして極めて貴重な書籍といえる。

スタッフレポート

IGeLU：Ex Libris ユーザー会 年次大会に参加して

木下 和彦（課長）

2014年9月15日～20日にイギリスのオックスフォードで、Ex Libris ユーザーグループ（IGeLU：The International Group of Ex Libris Users）の年次大会が開催されました。図書館の活動の一つを紹介するという意味で、今回、参加する機会を得たこの大会について紹介したいと思います。

Ex Libris というのは図書館システムを開発・提供している会社で、みなさんが日常的に使っているKOSMOSは、この会社のPrimoという製品、貸出や返却の際に図書館のスタッフがカウンターで使用しているのは同じくAlephという製品です。この大会は、こうした製品群の最新情報を得たり、同じ製品を使っているユーザーの活用事例を知ることができる貴重な機会となっています。

今回の大会には、32か国から総勢415名の参加者が集まりました。開催期間となる9月15日から17日までの3日間は毎日9:00から18:00までセッションが、加えて15日と17日の夜にはパーティが企画されており、盛りだくさんなスケジュールになっていました。このパーティや、あるいは昼間のコーヒーブレイクなども、ユーザー同士の情報交換のための貴重な時間です。知らない人と、同じ目的を持つ同志として話ができるのは、この大会の魅力の一つです。我々もこうした時間を活用して、多くの海外の図書館員と情報交換をしてきました。

初日の夜のパーティは、オックスフォード大学自然史博物館で行なわれました。日本では、博物館でパーティなんて想像できませんので驚きますが、実際に参加してみると、知らない者同士の会話のきっかけに展示物を話題にすることができますし、会話に疲れたらちょっと離れて一人で博物館鑑賞をすることもできます。なによりちょっと特別な気分が味わえる、すばらしいパーティでした。

オックスフォード大学自然史博物館でのパーティの様子

IGeLUの会場となった Oxford University Examination Schools

IGeLU会場内の風景

大会に話を戻しますと、現在のEx Libris ユーザーの最大の関心事は、次世代図書館システムとよばれている Alma です。2012年に販売を開始して以来、この2年間で全世界の100以上の組織で導入されており、それに加えてこれからAlmaへの切り替えを予定している組織が200以上あるということです。

私たちもこの新しいシステムには興味があり、さまざまな人たちに聞いてみましたが、もうすでにAlmaに切り替えており、全く問題ないという声や、我々同様にまだAlephを使っているが、近々にAlmaに切り替える予定といった声を多く聞きました。今はとても勢いがあり、数年後には相当数の図書館がAlmaに移行するのではないかということを感じさせられました。

せっかくオックスフォードまで行ったにもかかわらず、観光らしいことはほとんどできませんでしたが、世界で起きている図書館システムの新しいうねりの中に身を置いていることを強く感じることができたという意味では、大変貴重な経験をすることができました。

IGeLUで知り合った図書館員たちと。筆者は左端。

主な出来事（2014.10－2015.3）

「貴重書活用授業」はじめました

三田メディアセンターでは、図書館所蔵の貴重書やアーカイブ資料を閲覧しながら貴重書室で授業をする「貴重書活用授業」を行っています。これまでも文学部の先生方を中心に授業で貴重書を利用していただいていますが、より多くの方に利用していただくことを目指して、2014年秋学期より積極的な広報活動を始めました。「貴重書活用授業」という名称も今回新たに付けたもので、「カメレオンモドキ」がその文字の上に乗ったポスターをご覧になった方もいるかもしれません。「貴重書活用授業」の魅力は何より「本物」の価値を間近に感じることができる点です。「百万塔陀羅尼」や「源氏物語」といった教科書に登場するような貴重書も展示ケースのガラス越しではなく、直接見ることができます。塾生のみなさんに「本物」の魅力を感じてもらえる機会を、少しでも多く提供していきたいと考えています。

第26回慶應義塾図書館貴重書展示会『慶應義塾の王朝物語：源氏物語を中心として』　開催

2014年10月22日～28日、丸善・日本橋店3階ギャラリーで貴重書展示会が開催されました。図書館が所蔵する貴重書をテーマに沿って展示する貴重書展示会は、今年で26回を数え、通常は閲覧が制限される貴重書を一般の方々に無料公開する機会として毎回多くの来場者を迎えています。今回は、世界的な古典文学である日本文学の最高傑作『源氏物語』を中心に、『大和物語』『狭衣物語』等の王朝物語と、それに関連する貴重な資料を展示しました。展示監修者の佐々木孝浩教授が会場を巡りながら展示資料の内容や稀少性などをわかりやすく解説するギャラリートークも実施され、来場者は例年を大きく上回って2,000名を超え、大盛況のうちに幕を閉じました。

山中資料センター第2棟への資料移動が承認されました

11月13日の平成26年度第2回三田メディアセンター協議会にて、白楽サテライトライブラリーの契約終了に伴う資料移動が承認されました。新たに100万冊規模の山中資料センター第2棟を建設し、2015年度中に白楽から資料を移動します。2016年度以降、三田からも書庫狭隘化対策のため、資料の一部を移動する予定です。引越に伴う白楽資料の利用停止など、詳細につきましては、随時ウェブページなどでお知らせします。

■表紙の写真について

日本中に全部で30ほどある、藤江和子氏がデザインした「くじらシリーズ」の第1号となる作品（椅子）で、図書館新館が開館した1982年につくられました。板を並べて作ったもので、「くじらのようにデカイ家具だ」というところから“くじら”という名前が付けられたそうです。今では、学生の憩いの場所としてすっかり定着しています。

編集後記

年2回発行している『知識の花弁』、春号は図書館案内を中心とした内容になっています。三田には3つの図書館があります。その違いを理解し、上手に使いこなしていただけたら幸いです。三田の特色あるコレクション、貴重書、さらには三田メディアセンターの活動について、少しずつご紹介していければと考えています。図書館について知りたいこと、興味があることなどご意見、ご感想をお待ちしています。

編集・発行　慶應義塾大学 三田メディアセンター
〒108-8345 東京都港区三田2-15-45
TEL 03-5427-1654　FAX 03-5484-7780
発行日　平成27年4月1日
印　刷　有限会社 梅沢印刷所
http://www.mita.lib.keio.ac.jp